



デュルケーム／デュルケーム学派研究会
Japanese Association for Durkheimian Studies

ニュースレター 第8号 [2007年12月25日発行]

会長 大野道邦<mitikuni@mua.biglobe.ne.jp>
編集事務局 奈良女子大学文学部
TEL 0742-20-3264, 3259
編集 中島道男 江頭大蔵 小川伸彦
<mnakajima@cc.nara-wu.ac.jp><egasira@law.hiroshima-u.ac.jp><ogawax@dream.com>

デュルケーム／デュルケーム学派研究会の趣旨

世紀転換期のグローバルなレベルにおける社会的、文化的な変化の中にあって、最近、国際的にも国的にも、デュルケームやデュルケーム学派の業績の再評価の機運が高まっている。わが国においても、若い世代を中心としてデュルケーム／デュルケーム学派に関心を抱く研究者が増えつつある。

このような状況を考慮に入れつつ、前世紀転換期の古典であるデュルケーム社会学、および、その発展型としてのデュルケーム学派について調査・研究することによって、現世紀転換期の社会・文化・人間の構造や動態を分析・説明・解釈するための基礎的・原理的なパースペクティヴを明らかにしたい。このために、相互啓発的な研究会を定期的に開催する。

第14回研究例会（2007年4月21日、奈良女子大学）

報告1 木村雅史 氏（東北大学）
人格崇拜と「役柄」概念
——『フレーム分析』における「人一役割図式」からのアプローチ
コメンテーター：山田陽子 氏（広島国際学院大学）

報告2 横井敏秀 氏（富山国際大学）
デュルケームにおける「社会の自己意識」の問題
コメンテーター：梅沢 精 氏（新潟産業大学）

第15回研究例会（2007年9月29日、京都学園大学）

報告1 速水奈名子 氏（神戸大学）
社会学史におけるゴッフマン理論の位置づけ
——古典社会学理論の受容および現代社会学理論への影響
コメンテーター：木村雅史 氏（東北大学）

報告2 中倉智徳 氏（立命館大学）
発明と分業——経済的なものをめぐるタルド＝デュルケム論争
コメンテーター：菊谷和宏 氏（和歌山大学）

【第14回研究例会報告要旨】

〔報告1〕 木村雅史（東北大学）

人格崇拜と「役柄」概念

——『フレーム分析』における「人一役割図式」からのアプローチ

現代社会は、人格崇拜を前提とした上での人格間の質的な差異、すなわち「個性」を尊重する社会である。こうした個性至上主義に孕まれている階層格差の再生産の問題や、親密圏での共依存的な関係、それが子ども達に課してしまうストレス等に関して、教育社会学や犯罪社会学などの分野で様々な議論が展開されている。こうした議論は、人格崇拜や「個性」が、日々、人々が生きている「相互行為秩序」のなかで、いかに維持、再生産されていくのかという議論とかみ合せることで、マクローミクロに到るより一貫した射程を得るものと思われる。

以上のような問題意識のもとに、本報告では、人格崇拜や、それを前提とした上での「個性」が、いかに相互行為論的に達成されていくのかを考察するための枠組みの彫琢を目指し、具体的には次のような作業を行った。まず、初期の相互行為儀礼論から後期の『フレーム分析』（1974）に到るまで維持されているゴフマンのデュルケミアン的視角を、儀礼空間としての「状況」の参加者間に共通の注意の焦点（＝「状況の定義」）を設定し、その焦点を維持、変容させる社会的メカニズムの探求として抽出した。

初期の相互行為儀礼論において、参加者間に獲得されている共通の焦点として設定されているのが、人格崇拜の祖先であるところの「神聖な自己」である。その「神聖な自己」は、「敬意（deference）」と「振る舞い（demeanor）」という互いに相補的な関係にある儀礼的実践によって維持されている。ゴフマンは、他者の「神聖な自己」を維持していくために自己が行う行為である「敬意」を、さらに「呈示儀礼」と「回避儀礼」とに分ける。

「呈示儀礼」とは、他者の「神聖な自己」を評価するために、自己が他者に対して積極的に行わなければならない行為、及びその規制を意味している。対して「回避儀礼」とは、他者の「神聖な自己」から距離をとり、その領域を侵犯しないために、自己が他者に対して行つてはならない行為、及びその規制を意味する。ゴフマンによれば、両儀礼とも他者の「神聖な自己」を維持するために機能し、「同じ相互行為のなかに一緒に実現されねばならない」が、正反対の志向をもつ規制であるため、お互い「対立と葛藤」関係にある。

コリンズは、ゴフマンの相互行為儀礼論を読解するなかで、相互行為儀礼それ自身のなかに存在しているこうした構造的な葛藤は、そもそも社会が、自らを維持、再生産するために要請されていると論じる。人々の「神聖な自己」は、認知的な注意の焦点であるその限りで、聖性を付与されているに過ぎず、社会によって常に構造的な葛藤へと囲い込まれている「脆弱な vulnerable」ものでしかない。これが、初期の相互行為儀礼論において、ゴフマンが浮かび上がらせた相互行為秩序の一つの重要な特質である。

『フレーム分析』では、「状況」の参加者間に共通の注意の焦点を設定、維持している社会的な認知メカニズムそれ自体が本来的な「脆弱さ」をもっており、かつ、その「脆弱さ」が新しい注意の焦点を駆動していく動態が描かれている。初期の相互行為儀礼論で描かれていた「神聖な自己」が強いられている構造的な葛藤も、『フレーム分析』が主題化する「ここで進行していること」の「脆弱さ」から帰結するものである。

ゴフマンは、『フレーム分析』において、「ここで進行していること」の「脆弱さ」という発想を基軸に、「ここで進行していること」が切り替えられていく動態を記述していく。ゴフマンによれば、特定の枠組みを付与されることで同定されている「ここで進行していること」は、同定されることで逆説的にも、その同定からのズレへと導かれる。そのこと

で別の枠組みの付与が、そのズレを覆い隠すかたちで、誘発され、別の「ここで進行していること」への切り替わりが達成される。

さらに、ゴフマンは、『フレーム分析』のなかで「人一役割図式」という概念を用いながら、「ここで進行していること」の認知が獲得される過程で、他者認知の枠組み、その「脆弱さ」が果たす役割について論じていく。ゴフマンによれば、人は、いかなる「状況」下にあっても「ここで進行していること」を認知していく過程で、他者認知を確定することを要請され、「状況にかかわりのある役割」からの「役割距離」である「役柄 character」へと注意を焦点化する。さらに、人は、複数の「状況」下で、当該の他者が演じている複数の「役柄」を認知していくことで、当該の他者を固有な存在として特定し得るような「人物 personality」や「バイオグラフィー」へとその認知を移行させる。「人一役割図式」論が描きだすこうした他者認知のメカニズムは、初期の相互行為儀礼論が前提としていたような人格崇拜の宛先であるところの「神聖な自己」が、まさに認知的に獲得されていく過程を議論したものと位置づけることができる。

以上、本報告では、ゴフマンにおけるデュルケミアン的視角を、儀礼空間としての「状況」の参加者間に共通の注意の焦点を設定し、その焦点を維持、変容させる社会的メカニズムの探求として抽出した。こうした作業を踏まえた上で、そのデュルケミアン的視角を基軸に、初期、相互行為儀礼論を認知論的に基礎づける前提的な議論として『フレーム分析』における「人一役割図式」論を位置づけた。

〔報告2〕 横井敏秀（富山国際大学）

デュルケームにおける「社会の自己意識」の問題

デュルケームのテクストには、社会は「自己意識」をもつ存在である、との言説がしばしば登場する。本報告の目的は、この社会の「自己意識」概念に注目し、彼の社会学においてこの概念がもつ意味合いを明らかにすることである。とりわけ、この概念と彼の社会革新および近代性に関する論議との密接な関連について指摘したい。

1. 「社会の『自己意識』」と「反省」

デュルケームにおいて、社会とは「何よりもまず意識、それも集合体の意識」として捉えられているが、この意識は社会それ自身にも指向されている。社会は「自らが何であるかについての一定の自覚」をもつ、「自己意識(conscence de soi)」を具えた存在にはかならない。

社会の自己意識のありように関してとくに強調されるのは、その反省(自省)作用である。社会が自らのリアリティを正確に把握できず、あいまいな観念・感情の薄闇の中にまどろんでいるような場合、社会は十分な自己意識をもちえてはいない。反省を通じ、混沌たる集合的ドクサから脱け出て、客観的かつ明晰な自己理解に到達したとき、社会は「よりよく自らを自覚」し、さらに高次の自己意識を獲得しうる。

2. 社会の「自己意識」の高次化を要請するもの

わけても近代においては、反省を介した社会の自己意識の高次化は、社会が生存することそれ自体にとって、欠くべからざる要件となる、とデュルケームは論じる。複雑かつ流動的な環境の変化へ速やかかつ首尾よく適応するためには、社会は自らに対する認識をいっそう深化させ、固定的な因習や伝統の抵抗を克服しつつ、より展性に富む、「新しい」

存在へとダイナミックに変化を遂げていくことが必要だからである。

3. 自己意識精錬のための3つの装置 —— 科学、教育、国家 ——

社会の自己意識の高次化——それは社会革新の発条となる——への現実的な处方箋として、デュルケームは科学、教育、国家という3つの社会的装置に期待を寄せているように思われる。

彼によれば、かつて社会の自己意識を産出する装置としての役割を担ったのは宗教であった。儀礼的行為によって集団は周期的に自己を意識し、宗教的表象によって自らを確認・維持する。宗教は、いわば社会の自己認識のための原初的様式であった。近代社会において、宗教の役割を引き継いだのは科学である。科学はそれ自体、宗教に起源をもつものだが、合理的ロジックにより真理を追究する、反省の最も高度な形態とみなしうる。社会は自らが何を考え、何を感じ、また何を欲しているかを、それ自身の集合的制作物である科学を通じて省察することにより、「さらに高い自己意識に到達する」ことが可能となる。こうした科学の営みは、社会の道徳的秩序の変化を指導するという、高度に実践的な目的にも指向される。

また、学校教育は社会のメンバーの知性を啓発し、個々人に事物の法則を十分に思惟したうえでそれを自発的に受容する道徳的態度、すなわち「意志の自律」を涵養する。その結果、個人は社会の自己意識の明晰さに照応する「明晰で完全な意識」を獲得しうる。この教育の「合理主義的要請」において、教育と科学は内在的に結びついている。

他方、政治的領域において、国家はその高い意識性と反省度により、社会全体に流布する集合意識とは区別される表象を形成する、思惟と熟慮の機関として位置づけられている。それは「真の反省の機関」であり、一般大衆の拡散したあいまいな意識状態とコミュニケーションを行うなかで社会の内部で生起している事態を捕捉しつつ、何が社会全体にとり有益であるかについて熟慮する。こうした国家の意識の拡大と民衆との間のコミュニケーションは、翻って、自律的な市民を陶冶し育成する。科学が教育を通じて市民の知性を育てるとともに、国家はその反省作用により、自らの行為の理由を理解しつつ行動する成熟した市民を創出するのである。デュルケームはこのような「反省に基づく体制」を「民主政」と呼び、民主政こそは、「社会が最も純粋な自己意識に到達するための政治形態である」と論じている。

上記3つの社会的装置は、従来個別に論じられ、その内的連関が問題とされることがあまりなかったように思われる。だが、社会の自己意識の高次化という共通項ないしは重心を設定するとき、それを要として、この3者はある種のトリアーデをなすことが明らかとなろう。そしてそれは、3者の営みが、社会革新を目指すデュルケームの戦略的意図という観点から、統一的に了解される可能性を開示しているともみなせよう。

4. モダニティの文脈における社会の「自己意識」の位置

デュルケームの論じる、反省を通じての社会の自己意識の高次化とは、帰するところ、伝統主義から離脱して「社会革新」を実現するためのいわば「近代化戦略」として構想されていたように思われる。『社会分業論』の機械的連帯と有機的連帯の二分法が用いられなくなった後、彼の近代化への視角を引き継いだのは、社会の自己意識論であったと言えば、極論に過ぎるであろうか。その一方で、彼の社会革新をめぐる議論には、近代社会を、己の生み出した科学や国家の反省能力によって自らをより高次の自己意識へと達せしめ、自分自身をつくりかえていく、すぐれて自己組織的な存在とみなす視点が垣間見える。そしてこの再帰的な自己変革力は、自己意識が高次化するほど強力になるとみなされている。A.ギデンズは、「近代の社会生活の有する再帰性は、社会の実際の営みが、まさしくその営みに関して得た情報によって常に吟味・改善され、その結果、その営み自体の特性

を本質的に変えていくという事実に見出すことができる」と指摘し、ここにモダニティのダイナミズムの1つの源泉をみているが、この見地はすでにデュルケムによって闡明されていたとも考えることができよう。

【第15回研究例会報告要旨】

〔報告1〕 速水奈名子（神戸大学）

社会学史におけるゴッフマン理論の位置づけ ——古典社会学理論の受容および現代社会学理論への影響

本報告の目的は、ゴッフマン理論における古典社会学の受容を分析することを通じて、同理論の基本構造、およびその社会学史における位置づけを再検討していくことにあつた。特にここでは、彼の理論にみることができるデュルケム理論、そしてパーソンズ理論からの影響、およびそれらへの批判の検討を中心に分析を進めている。

以下、本報告の構成を示しておく。まず第一節においては、ゴッフマンが影響を受けた後期デュルケム理論における「儀礼論」について考察を深めている。デュルケムは『宗教生活の原初形態』（1912）において、儀礼を集合表象の生成・維持を司る要因であると指摘していた。

続く第二節においては、デュルケム理論から影響を受けたパーソンズ理論における儀礼論を検討し、パーソンズとデュルケム両者が、儀礼をいかなるものとして認識していたのかを比較しながら分析している。パーソンズは、『社会的行為の構造』（1937）において、後期のデュルケム解釈を通して、儀礼という表出的行為が価値体系の維持を可能にしていると指摘していた。

第三節では、ゴッフマンが自らの相互行為論に、古典社会学理論をどのように取り入れたのかを検討している。彼は相互行為を分析対象としつつも——単に解釈主義的な立場を採るのではなく——、それを一つの独立したシステム（パーソンズ）として捉え、機能主義的な観点（デュルケム）から相互行為秩序の在り方を分析した。その際、彼は聖／俗論に基づいた「人格崇拜」という概念に依拠し、相互行為儀礼が秩序の生成・維持を可能にしていると指摘している。この「人格崇拜」という概念は、周知のとおりデュルケムによって提示された概念であるが、ゴッフマン理論において同概念は、デュルケムやパーソンズが想定したような「純粹に」道徳性に基づいた信念体系ではなく、人びとが印象操作をはじめとした「道徳の商人」[Goffman, 1959]とならざるをえない陥穂を孕んだものとして導入されている。

最終節では、ゴッフマン理論における儀礼論の導入を再検討することを通じて、同理論の基本構造を明確にしている。ゴッフマンは初期の理論構築において、デュルケム理論における聖／俗論に基づいた儀礼論を援用し、相互行為秩序の分析を行っていたが、彼は同時に（主に後期の著作において）、動物行動学的儀礼論の発想を取り入れることで、相互行為の場における「なわばり」[Goffman, 1971]や、行為の「路線設定 alignment」[Goffman, 1979]に関わる議論を展開している。ゴッフマンは、これら二つの儀礼論の援用を通じて、従来の社会学理論とはオルタナティブな観点から、つまり——解釈理論、規範理論を超えた——認知的、表出的側面に依拠した相互行為論を展開しようとしていたことが確認できる。以上がゴッフマン理論の基本構造、および学史的位置付けを検討した本報告の要旨である。

発明と分業——経済的なものをめぐるタルド＝デュルケム論争

本報告では、ガブリエル・タルドとエミール・デュルケムの論争を、経済的なもの、とりわけ労働・分業・協同をめぐる議論から比較検討した。このタルド＝デュルケム論争は、1893年『社会分業論』におけるタルド模倣説への批判と、同年タルドによる「社会問題」と題された書評論文における『社会分業論』への批判が発端となった。

論争の検討に入る前に、デュルケムの『社会分業論』の「道徳科学」的側面を再評価しようと試みた。その際、ジョン・ロールズの「最も基礎的な観念」である「ある世代から次世代へと長期にわたる公正な社会的協働システムとしての社会」を援用した。このロールズの協働としての社会は、彼の正義論の契約論的側面からすれば意外なことに、「ある一定の瞬間に特定の政治社会にいる自分を見出すだけ」で、「われわれがそのなかに存在し、ここにいることは、自由ではない」ようなものとされている。これはまさにデュルケムが『社会分業論』において「有機的連帶」という語によって想定していた社会と重なっている。デュルケムは分業化した社会を引き受けて、「アノミー的分業」など現状の分業を批判しつつ、分業を本来的に道徳的事実であるとして、現状を変えるための条件を考察した。ロールズもこのような協働としての社会を前提としつつ、不平等を許容できる範囲にするために正義の二原理を考案した。この意味で、ロールズの正義論はデュルケムの設立した道徳科学の後裔とみることができるのでないか。

ところで、タルドはデュルケム（やロールズ）とは異なる道を進んだ。タルドは分業が進展しつつあることを認めつつ、分業が本来的に道徳的性質を持っているというデュルケムの主張を厳しく批判した。「分業は、社会化させるものでもなければ道徳化させるものでもなく、それを突き詰めれば、職業的階級間のあらゆる観念、心、言葉の一致さえも消失させるまでになる……分業は職業的階級を、まったく分断された身分制へと強化する」

（Tarde 1893: 628）。このように、タルドは分業を職業的階級間の分断を進めるものとしてとらえており、分業を規範によってあるべき姿にするという方向へは進まなかった。さらにタルドは、デュルケムの機械的連帶から有機的連帶への移行という主張を「幻想である」として否定した。タルドによれば、模倣による類似からなる連帶と分業による連帶の二つは確かに分けられるが、一方から他方へ置き換わるわけではないからである。

このような分業への評価と対策の差は、デュルケムとタルドの「社会問題」に対する理解の差としても現れている。デュルケムは、社会問題を貧困問題と労働問題を包摂するものとして理解していた。そしてさらに「富者」も雇用主もかかわりうるという意味で、この二つの問題を超えてもいるものとして理解していた。それに対し、タルドも「社会問題」を通常の意味での労働問題や貧困問題としはてとらえていなかった。タルドは社会問題を、類似と差異、同化と対立の問題として理解していた。「新しい社会がそれじたいをモデルにして道徳や名誉にかかわる事柄を正しく再構築するのか、それとも古い道徳のほうが社会を再構築するだけの力と権利をもつことになるのか？」といったこと——教会道徳と世俗的道徳の対立を想起させるような問い——は、「社会問題ではない」のであって、「これらの問題はいずれ解決されるに決まっている」と一蹴する。タルドの「社会問題」とは、「労働組織」あるいは「国家的社会主义」によって「ヨーロッパ連合」が生まれるのか、あるいは「強力で自由な社会的権威」による独裁となるのか、そしてそれらは望ましいのかと問うものであった。

このようにいわれるとき、問題がずらされているように感じられるかもしれない。その背後にあるのは、タルドの社会概念である。タルドにとっての社会は、「サービスの交換」や「同じ法律に服していること」ではないし、「政治的」あるいは「宗教的な」紐帶

によって結ばれているものでもないとされていた (Tarde [1895] 2001=2007: 107)。このように経済的、法的、宗教的な関係による社会の定式化を拒んだうえで、タルドは「社会」を模倣と発明によって捉えようとしたのである。このときの発明や模倣とは、経済的・法的・宗教的なものが生み出され、普及し、変動していくことを記述するための概念である。

マウリツィオ・ラツツアラートの指摘によるなら、タルドの発明と模倣からなる社会は、デュルケム=ロールズによって引き受けられた分業からなる社会とは異なった、脳と脳のあいだの協同によって成立した社会である。このタルド的な協同を、ラツツアラートは「脳の協同」と呼んだ。価値の確立を理解するには、分業からではなく脳の協同から出発しなければならない。つまり価値は、物や行為に実在しているものでもないし、個人的な選好として固定化されているものでもなく、むしろ精神的な相互作用によって容易に変動するという事実から出発しなければならないとされるのである。このようなタルドの社会の定義とラツツアラートの議論を経由して、「社会問題」を再度考えるなら、次のような問い合わせになるだろう。貧困問題や労働問題は、どのような価値観が普及していることで維持されているのか、そしてそれを変えるためには、どんな概念を作り出し、価値観を変えていけばよいのか。このような仕方でタルドの問題設定を引き受け、デュルケム=ロールズ的な方向とは異なった問い合わせを提出することから、タルドの現在性を見出すことにつながるのではないだろうか。

Lazzarato, Maurizio, 2002, *Puissance de l'invention: La psychologie économique de Gabriel Tarde contre l'économie politique*, Paris: Les empêcheurs de penser en rond.

Tarde, Gabriel, 1893, "Revue général: Questions sociales," *Revue philosophique* 35: 618-638.

———, [1895] 2001, *Les lois de l'imitation: Étude sociologique*, Paris: Les empêcheurs de penser en rond.
(=2007 池田祥英・村澤真保訳『模倣の法則』, 河出書房新社) .

学会賞を受賞して

【第7回日本社会学史学会奨励賞】

『「心」をめぐる知のグローバル化と自律的個人像——「心」の聖化とマネジメント』
学文社 (2007年)

山田陽子 (広島国際学院大学)

先般、第7回日本社会学史学会奨励賞をいただきました。受賞作となりましたのは、『「心」をめぐる知のグローバル化と自律的個人像——「心」の聖化とマネジメント』(山田陽子著,学文社, 2007年)です。日頃よりデュルケム/デュルケム学派研究会でお世話になっている先生方に、この場を借りてお礼を申し上げます。

本書は2004年に神戸大学に提出した博士論文をもとにしたもので、博士論文は、学位取得後、なんとなく読み返すのが億劫でしばらく放置していたのですが、おかげさまで昨年、単行本として出版する機会に恵まれ、賞までいただけたことは望外の幸いでございました。こちらのニューズレターに寄稿する機会も頂戴しましたので、以下、拙著の概要について簡単に紹介させていただきたいと思います。よろしければお付き合いください。

本書の目的は、「心」をめぐる知のグローバル化について知識社会学的に分析すること

でした。日本では「心のケア」や「心の傷」、「心の教育」などの「心」をめぐる知が1980年代末よりおなじみになっています。しかし、より良い「心のケア」や「心の教育」とはいかにして可能かという方法論的議論や「心の専門家」のパターナリズムに対する批判的論議等は行なわれても、「心」をめぐる知が広く社会に普及するという現象それ自体の社会的文化的意味を根本から問うような社会学的研究はさほど提出されておりません。

それゆえ本書では、「心」をめぐる知の広まりや「心」に関心が向けられる社会状況を社会的・文化的現象としてとらえ、社会学的分析の俎上にのせています。いわば、「心」の問題を社会学の問題として考えようとするものです。手始めに、第1章「『心』をめぐる知のグローバル化」において、主に1980年末から現在に至る日本社会における「心」をめぐる知の系譜をたどりました。すると、自分探しやポップ心理テストブーム、犯罪者やストーカーの「心の闇」、アダルトチルドレンや摂食障害者の「心の傷」、被災者や犯罪被害者の「心のケア」、青少年の「心の教育」、過労自殺や職場のうつ病対策としての「心の健康」政策など、さまざまなかたちで「心」をめぐる知が生み出され、専門クリニックの壁を超えて社会一般に流布していることがわかります。

そして、このような「心」をめぐる知の広まりは日本に限ったことではありません。たとえばWHOは近年の世界の自殺について調査し、自殺者の8割～10割に生前うつ病の罹患が認められると指摘しています。そして、人種や宗教、政治的信条、経済的社会的状況にかかわりなく世界中の人々にDSMなどの診断基準を適用して気分障害や統合失調症の兆候を早期に発見すること、ならびに、QOLを高めるため、「心の病」を予防するためにはストレスマネジメント教育の重要性を説いています。いいかえれば、「心」をめぐる知が国境を越えて広まる中で、人間の精神の在り方や人格の望ましさの規準が宗教的要請や当該社会の道徳というよりも、むしろ精神医学的ないし心理学的な語彙や視点によって規定される状況が世界的規模で生じています。

かつて、自己形成や社会統制に決定的な役割を担ったのは宗教でした。そして、神がこの世を人間の手に預けることによって逆説的に超越的存在として存続するようになってからは、道徳がその役目を継承しました。周知の通り、E.デュルケームによれば、近代社会の道徳の基本原理は、人間の人格がこの上もなく神聖であり、あらゆる宗教の信者たちが神のために捧げるのに似た尊敬を受ける権利をもつとみなすものです。個人は「善(bien)」としての道徳を求め、愛着し、「義務(devoir)」としての道徳に畏怖の念を持って服従する。神への献身の代わりに、人格という普遍的な属性への「畏敬と愛着」という道徳律に従うことで個々人の人間性が高められるとともに、そうした普遍的価値へのコミットメントを通じて社会統合が可能となる。このようにデュルケームは指摘したのでした。

しかし、社会を道徳的存在として構想する伝統的な社会学理論は、ポストモダン思想の登場や、実社会における機能分化の一層の進展と複雑性の増大、価値や承認をめぐる対立抗争、個人化とリスクの前景化などを前に再考を迫られています。そして、それと呼応するかのように、精神医学的・心理学的知識が病の治療法や悩みの解決法という範疇を超えて現代人の多くを取り込み、自己の構築・維持・取替えや対人関係における印象操作や役割演技、日常的な思考習慣や行動様式の成型加工に科学的正当性と多様なオプションを提供しつつ、非暴力的な社会統制装置としての機能を増大させつつあります。

それゆえ、「心」をめぐる知の広まりは、単に「心」ブームとして処理したり「心の専門家」のパターナリズムについて批判したりすればすむ問題ではありません。むしろ、社会学の課題である「個人と社会」について再考を促す契機となる現象として分析されるべきです。したがって本書では、「心のケア」や「心の教育」を文化的・道徳的現象として理論的に考察すること、ならびに「心」や人格をめぐるコミュニケーションの具体的場面を観察して分析することを通して、現代社会に支配的な人間観や自己のあり方、道徳の今日的様相について理論的・実証的双方の側面から明らかにしようとした。現代社会の

中で「人格」や「心」がどのように捉えられているのか、とりたてて「心」がアジェンダとして浮上する社会としない社会の違いは何かといった点について検討することは、現代社会における宗教性や道徳とは何か、近代的個人とは何であったのかについて再考することへと通じています。

第2章「『心』をめぐる知の社会的機能」では、M.フーコー、A.ギデンズ、R.ベラー、N.ローズなどの議論から、「心」をめぐる知の社会的機能について「管理機能」、「解放機能」、「解放による管理機能」という3つの側面から検討しています。これらの機能を有する「心」をめぐる知が普及し、「心」に過剰なまでの関心や配慮が向けられる社会の出現はいかに説明することができるでしょうか。本書では、「心」を先駆的に捉える思考法から一旦距離を置くためにデュルケムの「人格崇拜」を出発点として選び、個人という観念の誕生という点に遡って検討します。

第3章「人格崇拜の展開——デュルケム、ゴフマン、ホックシールド」においては、E.デュルケムの「人格崇拜」に関する議論にE.ゴフマンの儀礼的相互行為論とA.ホックシールドの感情マネジメント論を接続し、人格や感情に関する三者の議論を「人格崇拜」論の学説史的展開として通読しました。それは、一般的には「感情労働」や「感情マネジメント」の概念で知られているホックシールドの議論を、脱産業社会における「人格崇拜」論として再構成しようとするものです。

デュルケムの宗教社会学からゴフマンの儀礼的相互行為論、ならびに、ゴフマンの儀礼的相互行為論や演技的自己論からホックシールドの感情マネジメント論への理論的影響はよく知られていますが、デュルケムからホックシールドへの影響を指摘する研究は、管見のかぎり見当たりません。しかしながら、ホックシールドによる「感情の贈与交換」というタームや、彼女が「感情規則」について記述する際にデュルケムによる感情の社会的規定という発想に言及している点に注目することによって、デュルケム社会学からホックシールドの感情マネジメント論への影響が見えてきます。その際、デュルケムとホックシールドの間にゴフマンの儀礼的相互行為論を置き、ゴフマン理論におけるデュルケム宗教社会学の痕跡と、ホックシールドにおけるゴフマン理論の痕跡とを明確にすることによって、三者の連続性と異同がより鮮明に浮かび上がります。

デュルケムの「人格崇拜」とは、「personne humaine」、「l'individu en général」、「l'humanité」の崇拜、すなわち、人間性や個人一般などの豊潤な意味内容を含んだ理念の崇拜でした。そして、ゴフマンの儀礼的相互行為論やフェイスワークに関する議論において示されているのは、「sacred self」、「face」、社会的役割という殻に守られた「私」という具体的個人の崇拜です。さらに、ホックシールドの感情マネジメント論では、他者に敬意を表する場合、外的行為のみならず感情を操作することが重要となることが指摘されています。すなわち、脱産業社会においては生身の「feeling」、「emotion」、「heart」を常にマネジメントすることが人々に求められる一方で、「管理されない心」や「本当の心」が神格化されいくことが示唆されています。消費社会化、私秘化の波を受けて、「心」は傷つけたり侵犯したりしてはならない神聖不可侵の領域となっていきます。デュルケム段階における社会的広がりを持った「人格」一般に対する崇拜が、ホックシールド段階では私秘化し、個別的な「心」の崇拜となっており、そこではデュルケム社会学やゴフマンの儀礼的相互行為論においてほとんど省みられることのなかった個別の感情や欲望の方にこそ照準が合わされています。

「第4章 『心』の聖化」においては、世俗化、私秘化、消費社会化と感情労働、個人化といった大きな社会的文脈の中にデュルケム以来の「人格崇拜」の展開を位置づけます。前章で行なった理論内在的な研究を社会の動きと関連させることによって、社会状況の変化に伴う「人格崇拜」の変容をよりクリアに抽出しようと試みました。その際、補助線としてデュルケムによる「人間の二元性」やゴフマンによる「神聖な自己」と「司祭」

の関係軸などを用いています。

近代化の創成期を生きたデュルケームの「人格崇拜」において、個人の人格の神聖性とは、神聖なる社会の道徳的理想的を意欲し、それを体現することによって分有されるものでした。神聖であるのは人間そのものではなく社会であり、人格の神聖性は聖なる社会に由来します。また、神に代わる崇拜対象となった個人は、ゴフマンの儀礼的相互行為において、自らが「神 (god)」であると同時に「司祭(priest)」であるものとして描き出されています。個々人が社会的に取り決められた振舞いのルールを遵守し、「司祭」として儀礼的行為を遂行することによって、集まりの秩序が保たれるとともに、行為者の自己に神聖性が賦与されることになります。

言いかえれば、デュルケームやゴフマン段階の社会状況では、個人の神聖性は明確に社会的なものによって基礎付けられていました。20世紀中葉の大衆社会において、道徳的理想的を意欲して体現するような聖なる個人の像は徐々にリアリティを失っていくとはいって、「エチケット」や「状況適合性の規則」などの社会規範は一定の強制力を持って存在していました。しかし、時を経て、個人が社会から聖性を獲得すべき「人格崇拜」は先取りされた聖性から出発する「人格崇拜」へと変容していくことになります。

そして、脱産業社会化が進み、私密化や個人化が生じる中、現代の聖なる個人が自らの「司祭」役割を遂行する能力も危うくなります。確実に依拠しうる道徳や普遍的価値が見失われてしまったために無理もないことでしょう。かつては「司祭」と「神」が手を結び、「司祭」が儀礼的行為を遂行して巧みに「神」を祀っていましたが、「司祭」を極小化させた現代の聖なる個人は、いささかナルシシスティックな祭神を大事に抱えて右往左往するばかりです。現代社会では、道徳的理想的を体現したり「司祭」として儀礼を遂行せずとも、私は私である限り、私の存在自体が聖であるという通念が支配的になっています。現代人が自らの聖性の由来について忘却し、自明視するに至った結果、聖なるものは個々の人間そのものの中に見出されようとします。しかしながら、デュルケームが指摘している通り、いくら探しても人間それ自体になんら聖性は確認できません。そこで、「神」の聖性を無条件に保証して存在論的安心を提供しつつ、「司祭」としての儀礼遂行能力を補完すべく外部委託された「司祭」として、「心」をめぐる知が登場することになります。

「第5章 マジックワードとしての『心』」、「第6章 『心』をめぐるコミュニケーション」では、前章までの学説の再構成とそれによる解釈という範疇を超えて、具体的な事例の分析を行なっています。「心の教育」に関するフィールド調査をもとに、「心」というシンボルを介して宗教的・道徳的な事柄と精神医学的・心理学的な事柄が結びついていることを指摘し、道徳が心理学化していく過程について記述しました。

「心の教育」では、不登校やいじめ、「キレる」などの逸脱行動が「ストレス反応」として生起するとみなされており、それゆえ、いじめや殺人の禁止といった「人格の相互尊重」という道徳的課題は善惡の問題ではなく、ストレスマネジメントや感情のコントロールの成功／失敗の問題へと意味を転換されています。また、道徳と心理学的知識が結びつく中での自律的個人像は、社会の道徳的理想的を体現するようなものではありません。むしろ、道徳的問いには沈黙し、原理と効用への問いにのみ応える心理学的知識を用いて心身状態をモニタリングし、外的環境に適合するよう自らの感情と行為をマネジメントするような個人像です。

以上が本書の概要です。現在は、これまでの研究をふまえて、労働の領域における心理学化の研究を進めています。昨今のうつ病対策や過労死・過労自殺の予防、ストレスマネジメントなど、労働者の「心の健康」に対する動向に注目しつつ、個人化やリスク、福祉国家と福祉社会、「社会的なもの」や連帯について問い合わせていきたいと考えています。

デュルケーム／デュルケーム学派研究会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

【会員業績】

- 安達智史, 2007, 「社会分業論再考——ナショナリズム論の視角から」『社会学年報』(東北社会学会年報編集委員会) 36: 105-125.
- 池田祥英, 2007a, 「19世紀末のフランスにおける社会学の確立：ガブリエル・タルドの思想を中心として」『フランス哲学・思想研究』(日仏哲学会) 12: 63-71.
- , 2007b, 「解説：ガブリエル・タルドとその社会学」ガブリエル・タルド(池田祥英・村澤真保呂訳)『模倣の法則』河出書房新社, 511-533.
- 池田祥英・村澤真保呂, 2007, [翻訳] ガブリエル・タルド著『模倣の法則』河出書房新社 [原著:Tarde, Gabriel, 1895, *Les lois de l'imitation: étude sociologique*, 2e éd., Paris: Félix Alcan.]
- 江頭大蔵, 2007a, 「集合意識——デュルケーム」土井文博・荻原修子・嵯峨一郎編『はじめて学ぶ社会学——思想家たちとの対話』ミネルヴァ書房, 37-44.
- , 2007b, 「デュルケーム道徳論における「義務」と「善」の関係について」『広島法学』31(2): 21-42.
- 岡崎宏樹, 2007a, 「人間の聖性について——バタイユとアガンベン」『Becoming』20, BC出版, 3-24.
- , 2007b, 「[書評] 松浦雄介著『記憶の不確定性——社会学的探求』」『ソシオロジ』160: 117-121.
- 小川伸彦・山泰幸編, 2007, 『現代文化の社会学 入門』ミネルヴァ書房.
- 小川伸彦, 2007a, 「表象される奈良——B面の「なら学」のために」『奈良女子大学文学部研究教育年報』3: 27-37.
- , 2007b, 「文化の遺産化——「文化財」はどこからきてどこへ行くのか」, 小川伸彦・山泰幸編, 『現代文化の社会学入門』ミネルヴァ書房, 251-267.
- 菊谷和宏, 2006c, 「トクヴィルとベルクソン：近代民主主義の人間的／超越的基盤」『日仏社会学会年報』(日仏社会学会) 16: 89-112.
- , 2007, 「小林秀雄「感想」についての試論(2)——物理学と社会理論」『経済理論』(和歌山大学経済学会) 336: 19-34.
- 木村雅史, 2007, 「E・ゴフマンの相互行為分析の展開——『フレーム分析』における「括弧入れ」概念の意義」『社会学研究』(東北社会学研究会) 81: 23-46.
- 白鳥義彦, 2007, 「現代フランスにおける華人社会の形成」佐々木衛編『越境する移動とコミュニティの再構築』東方出版, 217-233.
- 杉谷武信, 2007, 「デュルケム社会学の方法論と社会観の現代的意義について——デュルケムのサン・シモン論を中心に」『社会学論叢』(日本大学社会学会) 159: 1-17.
- 伊達聖伸, 2007a, 「ライシテは市民宗教か」『宗教研究』(日本宗教学会) 354: 1-24.
- , 2007b, 「コラム・フランスのヴェール問題」田中雅一・川橋範子編『ジェンダーで学ぶ宗教学』世界思想社, 74-75.
- DATE-TEDO Kiyonobu, 2007c, "L'histoire religieuse au miroir de la morale laïque au XIXe siècle en France," thèse de doctorat présentée à L'université Charles-de-Gaulle Lille 3, sous la direction de Jacques Prevotat (Lille3) et de Jean Bauberot (EPHE) (codirection), 641p.
- 中倉智徳, 2007a, 「訳者解説 「創造と協同の社会」の可能性を発明する——「所得を保証すること」によせて」『VOL』2: 27-28.
- , 2007b, 「発明の力能——ポストフォーディズムにおけるガブリエル・タルド」『現代思想』35(8): 125-137.
- , 2007c, [翻訳] マウリツィオ・ラツツアラート(Maurizio LAZZARATO)著「所得を保証すること——マルチチュードのための政治」『VOL』2: 20-26.

- 中島道男, 2007a, 「バウマンの社会理論——ポストモダニティ・道徳性・デュルケム」『社会学史研究』(日本社会学史学会) 29: 3-19.
- , 2007b, [翻訳] ジグムント・バウマン著『廃棄された生——モダニティとその追放者』昭和堂 [原著: Bauman, Zygmunt, 2004, *Wasted Lives: Modernity and its Outcasts*, Polity]
- 藤吉圭二, 2007a, 「贈り物——人はそれに何をこめるのか」小川伸彦・山泰幸編『現代文化の社会学 入門』ミネルヴァ書房, 79-95.
- , 2007b, 「3 D C G を用いたインタラクティブな高野山立体地図作成の研究」和歌山県『平成18年度 大学等地域貢献促進事業成果報告書』35-42.
- , 2007c, 「[書評] デジタルアーカイブ推進協議会『デジタルアーカイブ白書 2005』」『記録と史料』(全国歴史資料保存利用機関連絡協議会) 17: 41-44.
- 巻口勇一郎, 2007a, 「無意識より沸きあがる集合力による共同意識形成——デュルケム、ヴェーバー、ルーマン、ユングにおけるトランスペーソナルな心理と社会」『トランスペーソナル心理学・精神医学』(日本トランスペーソナル心理学、精神医学会) 8: (校正中)
- , 2007b, 「高等教育における東洋的身体技法体験前後の学生の気分変化について——POMS と自由記述法を用いて」『常葉学園短期大学紀要』38: 203-216.
- , 2007c, 『静岡県内県議・市議および高校生のいじめ問題に関する意識調査結果報告書』静岡人権フォーラム (静岡県教育委員会・静岡市教育委員会後援 ジンケンシンポジウム in 静岡講演資料).
- 松永寛明, 2007a, "Criminal Justice and the Audience in the Meiji Period Japan," COE, Urban-Culture Research Center ed., Challenges for Urban Cultural Studies, Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University, 129-139.
- , 2007b, 「[書評] 佐藤哲彦著『覚醒剤の社会史——ドラッグ・ディスコース・統治技術』」『犯罪社会学研究』(日本犯罪社会学会) 32: 162-164.
- 三上剛史, 2007a, 「「社会的なもの」の純化か終焉か?——<連帯の喪失>と<道徳の迂回>: システム分化と統治性」『社会学評論』(日本社会学会) 57(4): 687-707.
- , 2007b, 「リスク社会と知の様式——不知と監視」田中耕一・荻野昌弘編『社会調査と権力』世界思想社, 21-43.
- , 2007c, 「「切り」つつ「結ぶ」メディアとしての<愛>——Liebe als Passion (N.Luhmann)解釈のためのノート」、『国際文化学研究』(神戸大学大学院国際文化学研究科紀要) 29: 93-116.
- , 2007d, 「リスクと不安: グローバル化、公共性、連帯」『21世紀ひょうご』(ひょうご震災記念 21世紀研究機構) 3: 1-11.
- 山田陽子, 2007a, 『「心」をめぐる知のグローバル化と自律的個人像——「心」の聖化とマネジメント』学文社.
- , 2007b, 「心理ブーム——人はなぜ、感情をコントロールするのか」小川伸彦・山泰幸編, 『現代文化の社会学入門——テーマと出会う、問い合わせを深める』ミネルヴァ書房, 39-57.
- 横井敏秀, 2007, 「デュルケムにおける『異質性』と『同質性』の問題——『異文化共生』の視点から」『社会学史研究』(日本社会学史学会) 29: 101-119.

§ 編集事務局より §

ニュースレター第8号をお送りいたします。本号から会員業績の文字ポイントを大きくしてみましたが、見やすくなりましたでしょうか。さて、次回第16回例会は、4月19日(土)に和歌山大学で開催の予定です。皆様との再会を楽しみにしております。